



山茶花の通夜



youko103

山茶花の通夜

私たちの住む千葉市の団地は、4階建ての建物が24棟あって、全体で戸数は528戸である。45年前に住宅供給公社が建てた。部屋が三つしかない狭い家だが、建てられた当時は、住宅難であったから、新しいモダンな建物であった。今は老朽化して、いずれは建て替えも必要である。

ただこの良いところは、敷地の芝生が広いことである。それと、棟と棟の間に山茶花の垣根があって、毎年11月になると、ピンクや赤や白の花が咲く。

隣の第9棟に住むSさんは、45年前からずっとここにいる。ご主人は、定年退職後、ずっと住宅管理組合の常任理事を勤めてきた。団地にはなくてはならない人だったが、20年ほど前に脳卒中で亡くなった。一人いた娘さんも、結婚して隣町に引っ越した。以後、Sさんは、ずっと一人で暮らしてきた。

Sさんは、性格の穏やかな、美しい人だった。買い物に行くときなど、私はよく彼女と道で出会った。

「娘に迷惑はかけたくないの」と彼女はいつも言っていた。年をとって身体が不自由になっても、できるだけ自立して生活しようとしていた。

足が不自由で、すぐ近くのスーパーに買い物に行くのも、苦労のようだったので、私も気になって、「おっしゃってくだされば、代わりに買い物してさしあげますよ」と言っていたのだが、「そう、ありがとう」と彼女は言うだけで、一度も私に頼まなかった。私ももう60代だが、一応元気である。

Sさんは、旅行好きのようだった。しかし、老人でもあり、一人ではなかなか旅行できない。団地の自治会が、年に2回、6月と11月に日帰りバス旅行をする。Sさんは、そこに参加したいようだった。

6月、房総の紫陽花寺に行く計画が発表された。知らせを見て、私が自治会事務所に申し込みに行くと、「あなたが2番目の申込者ですよ」と事務員のFさんが言った。

「そう？ 1番目は誰？」

「第9棟のSさんです」

「まあ、Sさんは、この前もバス旅行に行きたいと言っていたから、良かったわね。お身体も大丈夫になったんでしょうね」

「そうのようですよ」

道でSさんに会ったら、

「旅行、ご一緒しますから、よろしく願いしますね。一人では行けないから、みんなと一緒に行きたいんですよ」と挨拶された。

しかし、その後、彼女は足を痛めてしまったのだ。杖をついて、痛む足を引きずり、引きずり、やっと歩いていた。

「大丈夫ですか？」

「ダメなの。旅行にも行きたいけれど、行けなくなってしまったの」

「そうですか……でも、この次もありますから、また、今度」

「ええ、この次を楽しみにしていますね」

梅雨の頃で、あいにく旅行の日は雨が降っていた。でも、雨にぬれた紫陽花は、また風情があった。Sさんが来られないで残念だったが。

暑い夏が過ぎ、Sさんは少し元気になったようだった。秋になって、11月の旅行には参加できそうだった。

金曜日、私は道でSさん、Fさんと出会った。

「月曜日はバス旅行ですよ」とFさんが言う。「なんであなたは行かないの？」

「だって、私はマグロ一頭を食べる旅行なんて行かないわ」と私は言う。今度の旅行は、横須賀の軍艦三笠を見学し、三浦三崎でマグロ一頭を食べるのだそうだ。

「Sさんは、今度は行けるんですか？」

「ええ、今度はいいの」と、Sさん。

「そう、良かったですね」Sさんのために、率直に喜んであげた。

そして、月曜日。私は月曜日にはいつも行く団地の体操教室に行った。

体操の指導をしてくれるのは、第16棟のYさんだ。そのYさんが、思いがけない情報を伝えてくれた。

「Sさんが亡くなったんですって」

「え？ Sさんって、第9棟のSさんのこと？」

「そう。土曜日にいつまでも玄関に新聞がはさんであるんで、3階の人が不審に思って、自治会に連絡したんですって。自治会から連絡を受けて、娘さんが行ったら、もう亡くなっていたんですって」

「へええ……」

この月曜日は、自治会の旅行のはずだ。あんなに楽しみにしていたのに、彼女は旅行の前に亡くなったのだ……。

火曜日に、自治会から訃報が張られた。

Sさん、90歳、土曜日に死亡が確認された。今夜、お通夜。明日、告別式。葬儀会場まで自治会館からマイクロバスが出る。

Sさんのことは、団地のみんなが知っているから、きっと大勢参列するだろうな、と私は思った。

夜、礼服を着て、香典を持ち、自治会館に行った。マイクロバスに誰も乗っていない。

しばらくして、Fさんやその他、2、3人来た。自治会長のH氏と老人会の会長Aさんとは、先に会場に行って、受付をしているという。

それにしても、さびしいお通夜だった。娘さんと、4人のお孫さん、それに10人くらいの身内の人たち。団地の人たちは少なかった。老人会の人たちって、なんで来てくれないんだろうなあ、と思った。明日の告別式には来てくれるのだろうか？

Sさんの遺影は、にっこり笑って、かわいらしかった。

「あたしが撮ったのよ」とFさんが言う。敬老の日のお祝いに、90歳以上の人たちが表彰され

たので、皆で並んで撮り、その写真のSさんの部分だけ引き伸ばしたのだそうだ。良い写真だった。

しかし、葬儀社の人に「最後のお別れをしてください」と言われて、棺の中のSさんに花を入れたが、Sさんの顔.....美しかった彼女が、冷たく硬直して見るも無残な様子になっていて、かわいそうだった。

通夜振る舞いを受けて、またマイクロバスに乗り、団地に帰った。翌日は私は所用があった。

朝、外へ出て見ると、垣根の山茶花がちらほらと咲き始めていた。赤、白、ピンク.....つぼみも多い。山茶花がSさんの旅立ちを見送っているようだ。

今日の告別式は盛大だといいなあ、と思いながら所用先に向った。

2、3日して第9棟のBさんに会った。彼女は告別式に行ったという。

「どうだった？ 大勢来ていた？」

「ううん、少数だけ」

「まあ、お通夜だけでなく、告別式もさびしかったの？ みんな、薄情ねえ」ため息が出る。

後に自治会長の話によると、土曜日、朝の新聞が玄関ドアにはさまったままだった。3階の人が不審に思って、自治会に連絡した。会長のH氏は2階のベランダにはしごをかけて中をのぞこうとしたが、部屋の中の様子がわからない。しかたないので、緊急連絡簿を調べて、隣町に住む娘さんに電話したが、あいにく留守。留守電に用件を入れておいた。夕方、娘さんから電話があった。娘さんが行ってみたら、Sさんはお風呂の中で亡くなっていたそうだ。

「娘に迷惑をかけたくない」といつも言っていたSさん。その願い通りに、娘さんに何の迷惑もかけずに、逝った。

それにしても、金曜日の日中には元気だったのに、あっという間に逝ってしまった。年をとると、そういうことってあるのだろうか。

山茶花の花は次々と咲き、師走が来て、新年が来た。

八王子の老人ホームにいる叔母のところにお見舞いに行こうかな、と思っていた。その老人ホームには、私の亡くなった母の妹二人がいる。年上の叔母のほうは、もう認知症で、年下の叔母が面倒をみている。ずっと会っていないから、会いに行こうかな、と思っていた。

ところが、お正月を過ぎたら、突然、訃報が来た。上の叔母が肺炎で亡くなったという。お弔いは、火葬場が混んでいるので、数日後になるという.....。

悲しかった。大好きな叔母だったのだ。山茶花の咲く頃は、空気も冷たく、寒く、人が死にやすいのだろうか。父、母を始めとして私も多くの人たちを見送って来た。永遠の別ればかり経験して来た。これが人生というものなのだろうか。だとしたら、人生って随分つらいものなんだな、と思う。